

履歴および教育・研究活動の記録

五十嵐康男

I 履歴

1. 学歴

- 昭和 31 年 3 月 東京教育大学文学部文学科英語英米文学専攻卒業（文学士）
- 昭和 34 年 3 月 東京教育大学大学院文学研究科英文学専攻修了（文学修士）

2. 職歴

- 昭和 35 年 4 月 岩手大学学芸学部非常勤講師
- 昭和 36 年 4 月 岩手大学学芸学部助手
- 昭和 37 年 4 月 岩手大学学芸学部専任講師
- 昭和 39 年 4 月 中央大学商学部専任講師
- 昭和 41 年 4 月 中央大学商学部助教授
- 昭和 43 年 4 月 成城大学文芸学部助教授
- 昭和 47 年 9 月 日本学術振興会、日米研究者交流事業第 1 回派遣者（テキサス大学、ミシガン大学研究員）（昭和 48 年 11 月まで）
- 昭和 51 年 4 月 成城大学文芸学部教授
- 昭和 56 年 10 月 ロンドン大学教育系大学院客員研究員（昭和 57 年 8

- 月まで)
- 平成 3 年 9 月 リーズ大学 (イギリス) 英語学科方言研究室客員研究員 (平成 4 年 3 月まで)
- 平成 8 年 4 月 ブリティッシュ・コロンビア大学 (カナダ) アジアセンター客員研究員 (平成 8 年 10 月まで)
- 平成 8 年 11 月 モナシュ大学 (オーストラリア) 日本語学科客員研究員 (平成 9 年 3 月まで)
- 平成 16 年 3 月 成城大学を退職
現在、同大学名誉教授

II 教育・研究活動

1. 学会及び社会における活動等

- 昭和 54 年 大学英語教育学会賞 (第 1 回)
- 昭和 57 年 4 月 大学英語教育学会理事 (平成 14 年 3 月まで)
- 平成 9 年 4 月 国際応用言語学会世界大会 (東京) 組織委員・特別シンポジウム委員長 (平成 12 年 3 月まで)
- 平成 10 年 4 月 日本学術会議第 12 回国際応用言語学会世界大会委員会委員長 (平成 12 年 3 月まで)
- 平成 10 年 7 月 文部 (科学) 省、大学設置・学校法人審議会 大学設置分科会専門委員 (英語学・英語教育) (平成 13 年 3 月まで)
- 平成 14 年 4 月 大学英語教育学会 顧問 (現在まで)

2. 著 書

1. 『英語発音、その教え方と学び方』 (日本放送出版協会、1970 年)
[共著]

2. 『言語学入門』（大修館、1975年）〔共著〕
3. 『言語学のすすめ』（大修館、1978年）〔共著〕
4. 『外国語としての英語ヒアリング能力形成要因に関する実証的研究』（慶應義塾大学〔科研費助成研究〕、1978年）〔共著〕
5. *The Teaching of English in Japan* (Eichosha, 1978) 〔共編著〕
6. 『言語学演習』（大修館、1982年）〔共著〕
7. 『緊急英会話スペシャル』（日本英語教育協会、1984年）
8. 『現代言語学辞典』（成美堂、1988年）〔共著〕
9. 『入門ことばの科学』（大修館、1994年）〔共著〕
10. 『英語 正しい発音ができる』（ベレ出版、2000年）

3. 論文

1. “An Analysis of Pitch Sequences in British English”（『日本音声学会会報』108号、1961年）
2. “An Aspect of Stress Patterns in Phonemic Clauses”（『岩手大学学芸学部研究年報』Vol. 20、1962年）
3. 「現代アメリカ英語の発音——Kenyon & Knott と Webster 3 版の比較による——」（『中央大学英語英米文学 80 周年記念号』、1965年）
4. 「音高低スーパーフィックスの型」（『中央大学英語英米文学』7、1966年）
5. 「米語の変音についての仮説——その資料 50 型——」（『大塚論文集』復刊 1 号、1967年）
6. 「日本人に適当な『標準音』と『予測すべき音』」（『中央大学英語英米文学』8、1967年）
7. 「大学英語教育におけるヒアリング能力の現状とその発達に関する調査——共同研究——」（『大学英語教育学紀要』1, 2、1970、1971年）

8. 「大学レベルにおける 3 技能に関する調査——共同研究——」（『大学英語教育学会紀要』3、1972 年）
9. 「英語音声学の立場と役割」（『成城文芸』70 号、1974 年）
10. 「日本の英語教育（聞き、話す面）はどのように改善できるのか」（『学術月報』27、1975 年）
11. “Listening and Its Interference — An Observation on the Perception of English Sounds by the Japanese” (*Seijo English Monographs* No.19, 1980)
12. 「固有名詞の強勢」（『英語教育の新しい展開』、開拓社、1981 年）
13. 「スコットランドにおける英語の音声的特徴について」（『成城大学文芸学部創立 35 周年記念号』、1989 年）
14. “Phonological Contrasts between English and Japanese” (*Seijo English Monographs* No. 31, 1999)
15. 「音声英語の文法——強勢、高さ、息つぎの関係——」（『成城イングリッシュモノグラフ』第 36 号 [中村敬教授退職記念号]、2003 年）

4. 共同または部分執筆等

1. 『大学英語入試問題の検討——今後の改善のために』（開拓社、1972 年）
2. 『ランダムハウス大英和辞典』（小学館、1973 年）
3. 『授業研究大辞典』（明治図書、1975 年）
4. 『グランド百科大辞典』（学研、1976 年）
5. 『ヒアリング・テクニカル・コース』（日本英語教育協会、1983 年）
6. 『英語教育の常識』（大修館、1986 年）
7. 『ヒアリング・スピーキング 3 週間大特訓』（アルク、1986 年）
8. 『やり直し英語 4 週間』（アルク、1989 年）

9. 『ヒアリング・バイブル』（アルク、1989年）
10. 『英語ヒアリング集中レッスン』（アルク、1991年）
11. 『はじめてのヒアリング』（アルク、1993年）
12. 『使える英語』（日本実業出版、1994年）
13. 『応用言語学辞典』（研究社、2003年）

5. その他

1. 高校用英語教科書『Hello English』I, II, III（学校図書、1984～1990年）[著作者代表]
2. 英語の音声、LL、英国事情、英検などに関し、『English Age』（旺文社）、『百万人の英語』（日本英語教育協会）、『ヒアリング・マラソン』（アルク）、『Active English』（アルク）などに約300篇寄稿